

Title	老川南美氏による「こどものまち」で培われる高学年児童の主体性について：子どもがつくるまちミニさいたまを支える大人のかかわりから」報告（2014年度第3回<児童>における総合人間学の試み研究会）
Author(s)	老川, 南美 田澤, 薫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :61-62
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5280
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2014年度第3回<児童>における総合人間学の試み研究会
老川南美氏による「こどものまち」で培われる高学年児童の主体性について
—子どもがつくるまちミニさいたまを支える大人の関わりから— 報告



上段右：老川南美氏（発題者）

2015年2月25日、今年度最後の例会では、児童学科を卒業後NPO法人「子ども文化ステーション」で子どもの育ちに関わる仕事に就きながら、人間福祉学研究科で修士論文をまとめた老川南美氏を招いて発題をいただいた。以下、老川氏による発表内容報告である。

「こどものまち」のはじまり：

「こどものまち」は、子どもだけが市民になれ働いてお金を稼ぎ、そのお金を使って自由に過ごす仮想の街である。その嚆矢は、ドイツで市民団体ベタゴギッシュ・アクションが1979年にミュンヘン市国際児童年記念事業として行った「遊びの街（Spielstadt）」である。

日本への紹介は、木下勇著『遊びと街のエコロジー』（1996 丸善）による。これをうけて、1997年に高知県香北町にて「ミニ香北町」が開催された。ミニ・ミュンヘンに倣う程度は様々ながら「こどものまち」や「子どもがつくるまち」という名称は全国にひろがり、2013年の実態調査では全国に約70ヶ所の開催が確認された。

日本版「こどものまち」の特徴：

この活動には、明確な定義や取り決めがあるわけではない。

同じ「こどものまち」でも、開催目的や主催団体の形態によって準備方法は異なり仕組みも様々であるが、①子どもスタッフによる事前スタッフ会議がメインの活動となっていること、②「こどものまち」のねらいにおいて「子どもの主体性」が鍵概念になっていることは、共通する特徴である。

学校教育と「こどものまち」：

ミニ・ミュンヘン創始者ゲルト・グリユナイスルは、「遊びの街」をあくまでも教育的視点での「新しい学習」として説明した。

日本でも、1960年代以降に小学校教育で主体性や創造性を育む活動が盛んに研究された。このうち、福岡教育大学附属久留米小学校が『主体性から創造性への学習過程』（1969 明治図書出版）で行った定義によれば、「主体性」とは「人がある事態に立ち向かうときの構え、ならびにそれにまつわる主張、論理、知識、価値、情緒などをあわせ含むもの」で「意欲的である」「自主的である」「本質的もしくは、価値追求的である」から成る。学習のなかでは「主体的な学びのすがた（主体的受容）」「主体的なつくり出しのすがた（創造）」としてあらわれ、「主体性を基盤とするところに創造性があり、主体性なしには創造性はあらわれない」といわれる。

子どもがつくるまちミニさいたま：

NPO法人が自治体と協働し2010年から継続的に開催しているのがさいたま市の「こどものまち」、 「子どもがつくるまちミニさいたま」（以下、ミニさいたま）である。異なるミッションをもつ2団体が対等に協働することで、価値観や求めるものが違う者同士が協議しながら「こどものまち」の土台を作り、視点が複層的になる。2014年現在、

ミニさいたまは「ミニ大宮」「ミニ桜区」「ミニ見沼区」「ミニ南区」「ミニ浦和」の5つである。

「こどものまち」の骨格をつくるのは大人であるが、その中身を子ども達と考え、それを子ども達が自ら行うことは子どもの主体的な参画である。このことから、大人の関わりは決して邪魔ではなく、むしろ子どもの主体性は適切な大人の関わりによって支えられる。

以下に「子どもがつくるまちミニさいたま」の構成を紹介したい。

子どもスタッフ：会期の約2ヶ月前の夏休みに公募に応じた小学校4年生から中学3年生までの実行委員である。「こどものまち」当日まで、「まち会議」でまちの仕組み（通貨の単位、税制度や選挙の有無等）を話し合い、まちにあるお店を決め、それぞれが店長となり準備を行い、当日の運営を担う。

大人スタッフ：「まち会議」から関わる実行委員である。NPO法人スタッフと自治体職員が担うほか、ボランティアの高校生・大学生や保護者等で構成される。当日はお店に一人ずつ配置され、お店運営のサポートを行う。当日の朝、「大人スタッフガイド」を用いた簡単な説明会の後、担当するお店の店長である「子どもスタッフ」と顔合わせとなる。

区民：当日参加の小学校1年生から中学3年生までの子ども達である。約1ヶ月前から区報や小学校配布のチラシを通して募集する。

事例から読み解く子どもを支える大人の関わり

2013年度のミニさいたまの子どもスタッフ計113名のうち、「子どもの主体性が培われる」姿が顕著だった7名について、全7回のまち会議と当日の様子を事例化し分析した。

高学年児童に主体性が培われる大人の関わりを評価するために、福岡教育大学附属久留米小学校の研究成果等から次の指標を設定し、事例ごとに大人の関わりを分析・評価した。

・子どもにとって「許容的なふんい気」である（社

会福祉学の視座に立てば「受容的なふんい気」と言い換えられる)

- ・「望ましい方向へ引きもどすための助言」をおこなう
- ・「子どもが時間をかけて考える機会」を保障する
- ・子どもに「積極的緊張」をあたえる場面を設定する
- ・子どもにとって「集団のよき一員」となる
- ・子どもに対し「不合理な要求」を行わない
- ・子どもにとって「補助自我」的存在である

事例分析からは、評価項目同士が関連し合うこととともに、子どもスタッフが主体性を発揮しうるかどうかは大人の関わりによるところが大きいことが明らかになった。また、以下の行動指標を得た。

- ・子どもの側で、子どもの行動を見ている
- ・問題意識を子どもと共有する

大人スタッフにとって迷いがあるときに行動指標を参考にすることは、子どもとの関係を築ききっかけとなり得る。全国の「こどものまち」現場でこれらをどのように伝えるかが今後の大きな課題である。

(文責：老川南美 [おいかわ・みなみ] 聖学院大学大学院人間福祉学研究所修士課程2年)

(冒頭のみ文責：田澤 薫 [たざわ・かおる] 聖学院大学人間福祉学部児童学科教授)